九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

朴（金）堤上伝と倭国

辛, 鍾遠
韓国学中央研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/2186166

出版情報：韓国研究センター年報. 13, pp.29-43, 2013-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

朴（金）堤上伝と倭国

辛 鍾 遠（韓国学中央研究院　教授）

本稿は、2012年９月11日に九州大学韓国研究センターで開催された第59回定例研究会の講演資料に、その後、修正・加筆を加えたものである。

１．研究の視角

朴堤上または金堤上ともいう（『三国遺事』〈奈勿王金堤上〉条。以下、「金堤上条」と略す）[1] 新羅上代の忠臣の話は、千古の亀鑑として韓国古代の史書に立伝されて以来、朝鮮時代の三綱・五倫行實図に掲載されたり、今日の教科書などで紹介されたりしている[2]。『三国史記』の朴堤上伝（以下「朴堤上伝」と略す）には朴堤上の別名として「毛末」も載せられているが、この名前が『日本書紀』巻９の神功皇后五年条に出てくる「毛麻利叱智」であることはよく指摘されてきた。

堤上の人物と行績が内包する両面性は絶えず議論の対象にもなっている。その両面性とは、忠節のシンボルや韓国史の誇りとしてまさに堤上の一代記があるのだが、彼は当時の新羅と倭との間の国力を見定めるための好材でもあり、韓国と日本の両国の学界が互いに違う観点からこれに光を当ててきた。日本の学界では、当時の新羅と倭の国力の優劣を示す史料としてよく活用されており[3]、韓国側にとっては韓国古代史を国際関係という観点から考える際の一つのアキレス腱のような弱点でもある。類似例として、文武王の海中陵にまつわる「話」がある。これもまた実際とは無関係なまま事実として受け入れられてきた[4]。

堤上の活躍が目立てば目立つほど、新羅が倭に自国の王子を人質としてささげなければならない上下関係に置かれていたことになる。これを弁明したり、あるいは正したりするために、当時の「人質」の本質が果たしてどうであったのかについて[5]、韓国の学界はかなりの努力を払ってきた[6]。しかし、それ以前にいくつかの観点が前提としてなければならない。第一に、あまりにも当然なことであるが、当時の新羅にとって倭は、高句麗や百済と同様に他国にほかならない。新羅と倭の関係を後代の韓日関係へ延長・拡大すれば、すでに論議は正鵠を失している。第二に、堤上伝記とその関連史料の多様性に目を向けなければならない。この忠告は、堤上の史料が意図的であるかないかに関わらず、かなり屈折した形で伝えられているという事実があるということである。それは物語としての堤上の史料をどのように理解するかの問題である。第三に、新羅が倭に人質を献上するという

1）論議の便宜のため、朴・金氏が 問題にならない場合はただ「堤上」と書く。

2）朝鮮時代の文集や愛国啓蒙期に朴堤上を言及したものには嚴基榮の論文がある。「삼국사기 – 삼국유사 所載「박제상 이야기'의 비교 고찰」,『한국문학이론과 비평』19, 2003,「'박제상 이야기'의 수용 양상과 그 의미 – 인물형상을 중심으로」,『민족문화연구』39, 2003.

3）末松保和『任那興亡史』吉川弘文館、1956年、79～81頁。

4）신종원,「문무왕과 대왕암」,『삼국유사 새로 읽기(1)』, 일지사 참조, 2004.

5）「質」の意味には、一般的に知られているように弱者が強者に献上するという意味だけではなく、春秋時代にはむしろ儀礼的な性格が強く、戦国時代に入ってその意味が変わっていくことを論じた小倉芳彦「中国古代の質――その機能の変化を中心として」『中国古代政治思想研究』青木書店、1970などの論文がある。直木孝次郎は、日本書紀の「金春秋爲質」について「諜者的外交官」といった。「古代朝鮮における間諜の性格」『古代日本と朝鮮・中国』、講談社学術文庫、1988。

6）양기석,「삼국사기 인질의 성격에 대하여」, 사학지 15, 1981; 나행주,「고대한일관계에 있어서의 '質'의 의미 —— 특히 質의 파견목적을 중심으로」『건대사학』8, 1993などがある。

事件・事実を自らそのまま伝承・記録しておいたかという点である。見方によっては屈辱史観とも命名されるほどの記事だが、『三国史記』と『三国遺事』が高麗時代に撰述された書物であることを思い起こせば、これらの史書を書く際に「他者の物語」たる史料をあえて採用することができたとも仮定できる。すなわち、この「物語」は、高麗時代の人々が歴史を通じて忠君愛国を教える教訓であるが、過ぎ去った王朝の国格にはそれほど敏感でなかったともいえる。

堤上伝を通じて我々は、人質の性格の問題だけでなく王権の成長、堤上の家系、地方勢力の台頭や朴・昔・金の三姓の形成など、多様な方面の知見を得ることができる。まずこれらの研究史を整理してみたい[7)]。

金龍善は堤上を梁山地方の海上勢力として、王弟たちを連れて帰る任務をまかされるなかで中央貴族に編入されたと考えた[8)]。李鍾恒は倭人を朝鮮半島の南部一帯に居住する人々の通称と考え、その一部が九州の北部にまで根を下ろし、倭京の位置については「いかなる操舟技術がなくとも一昼夜ほどの行舟で倭の追捕から抜け出せる地点は、現在の福岡市の付近」だとした[9)]。堤上の史料の「倭」を北九州一円に本拠地を置いた勢力であるとの見解はその後の研究者たちも概ね同意している[10)]。ちなみに李鍾恒は、これら倭人が頻繁に海を往来したというのは当時の航海術や船舶を無視するものだとして、朴堤上の説話自体について次のような疑問を提起した。

> 三国史記の記録通りであるならば、未斯欣と堤上はひっそり海を渡って新羅まで攻め入ったはずなので、未斯欣と堤上が倭軍の陣地から新羅の陣地に渡ったとすれば、何の危険もなく、未斯欣の帰国はもちろんのこと、堤上までも帰国することができたのではないかという点である。それなのにわざわざ遠征の途中にある軍営から成功も確かでないまま、脱営逃走の冒険と堤上の犠牲という大きな代償を払ってまでこれを敢行しなくてはならなかったのかということである[11)]。

洪淳昶は、堤上伝を4世紀後半の大和政権の朝鮮半島出兵説の根拠として用いることができないことを集中的に論じた[12)]。彼は、史料の「質」が人質もしくは担保ではないとするとともに、説話の構造の問題や成立年代などについては考察の対象にしないとした。彼は、堤上の史料が鵄述神母の信仰と堤上の忠烈譚が一つに結びついたものであるが、朴堤上伝は金堤上条を伝記化したものであるため、伝説的な要素が少ないと考えた。

延敏洙は、反新羅勢力である倭との関係改善を通じて、倭の侵入による国力損失を防ごうとする意図から対倭の人質外交策を企図するようになり、このような外交策は實聖尼師今4年（405）の倭兵の明活城の攻撃、同7年の軍営設置によって失敗に終わったと考えた[13)]。しかし、1回の人質事件が新羅と倭との外交的な性格を規定できるか、外交的な友邦である新羅をどのような理由で攻撃したかについての補足説明はとくにない。彼は概ね史料の信憑性を信頼する立場から堤上についても次のように説明する。すなわち、堤上は頻繁な倭人との接触を通して倭人に精通し、勇気と智略があり、海上に詳しい海民集団の協力を得て未斯欣を脱出させたと[14)]。

金澤均は、当時、東海（日本海）の沿岸航海はそれほど難しいことではないとして、堤上をあえて海上勢力と

7）研究史は、申鉉雄の以下の論文でよく整理されている。신현웅「박제상의 出自와 신분 문제」,『신라문화』27, 2006;「박제상의 出自와 신분 문제(續)」『신라문화』28, 2006.
8）このような研究の嚆矢として、김용선,「박제상 小考」,『전해종 화갑기념 사학논총』, 일조각, 1979を挙げることができる。
9）이종항,「미사흔이 인질로 간 倭國의 위치에 대하여」,『한국학논총』4, 1981.
10）Chizuko T. Allen, “Silla’s Skillful Diplomacy under King Nulchi in the Fifth Century,” the 6th World Congress of Korean Studies, the Academy of Korean Studies, 2012.
11）이종항, 윗글, 22쪽.
12）홍순창,「김제상설화에 대한 일고찰」,『한국전통문화연구』2, 효성여자대학교, 1986.
13）연민수,「5세기 이전 신라의 대왜 관계 - 삼국사기 왜 관계 기사를 중심으로」『일본학』8・9, 1989 :『고대한일관계사』, 1998.
14）윗글, 387쪽.

する必要はないと考え、堤上は蔚山地域の海民集団の協力を得て王弟の救出に乗り出したとする[15]。そして、堤上伝は（昔）于老伝説と同様に、九州地域王朝と新羅の間にあった事実が甚だしく潤色され、架空の人物である神功皇后条に載せられることになったとする[16]。『日本書記』の新羅征伐、日本優位史観からすれば、于老や堤上の伝承は、彼らの当面の課題が以前から行われてきた「歴史」であることを物語る好材であるとした。

木村誠は、『日本書紀』神功皇后五年の記事の汙礼斯伐・毛麻利叱智・富羅母智を三人の人物の名前とはせず、汙礼斯伐を地名と考え、堤上を屈阿火村＝蔚山地方の出身の首長層［干］とした[17]。堤上は蔚山・梁山地域を支配しながら対倭外交を担当したが、当時、何人かの村干が外交政策に参加したのは、彼らの共同の意志を王に表明するためであり、迎日冷水里碑に見られる新羅王と干支層との関係と似ているとした。

高寛敏は堤上伝の原典を穿鑿し、堤上の「歃良州干」に見られる地名「歃良」が使われた時期は文武王五年（665）から景徳王代（742～765）にかけてであり、官職「干支」が「干」へ変わった時点が550年代以後であることを想起しながら、原史料は「歃良（城）堤上（または毛末）奈麻」のようになるとした[18]。新羅が倭に遣わした「質」については、当時、高句麗の支配下にいた新羅が、高句麗と敵対関係にある倭にも従属されるはずがないとして高句麗の承認をもらうか、あるいはそのような意向を受けたと考えた。新羅本紀に倭の侵入の記事が多いのは、新羅人たちが『国史』を編纂するときに高句麗に従属されたことを隠蔽するためだとする。彼は、堤上伝の原典は「憂息曲」の由来譚であり、より具体的には金大問の『楽本』のようなものだと想定した。西暦500年前後の新羅の対外関係の記事に後代の事情が幾重にも重なって出てくる堤上伝の原典を追跡しようとする姿勢は望ましい。その結果、朴堤上伝の最後にようやく現れる憂息曲の記事の意味を正しく把握したといえる。

宣石悦は、朴堤上を中央貴族と見て、朴堤上伝の冒頭にあらわれる世系を積極的に受け入れ、紀年の調整を行ったうえで、いわゆる「修正論」に立って史料を分析した[19]。朴堤上を新羅王京の骨族として捉える有力な証拠として、「実聖麻立干は鵄述の父」という王暦篇の記事の「鵄述」を朴堤上の夫人と考えている。しかし、王暦篇の史料の「鵄述」が必ずしも女性であるという根拠もなく、朴堤上の夫人の場合、鵄述嶺に登って鵄述神母になったことにしても、彼女の名前が「鵄述」であるかどうかは未知数である。もしも「鵄述」が人名であるならば、漢字で表記された古代の人名がそうであるように、同名異人である可能性も高いのである。宣石悦は自らの判断と調整を根拠として、西暦500年前後の新羅王室の３姓の浮沈を表明した。これを以ってして「試論や仮設にはなりこそあれ、確定的に断言できる問題ではないようである[20]」と申鉉雄は論評した。なによりも朴・金のような姓氏が後代に遡及・付与されたものだけであるために、堤上の出自をこのような系譜で追跡するには方法論上の問題がある。

婆娑尼師今五年に「朴氏貴戚」を地方へ派遣して州主や郡主にしたという記事に留意して、そのような実例として朴堤上の史料を扱ったのが朱甫暾である。朴堤上の祖先を婆娑尼師今としたのはこのような根拠からであり[21]、王京人が地方勢力化し、実際には干（支）を称したと考える。朴堤上伝の家系が何等かの根拠があって出てきたものであるとすれば、奈勿王金堤上条の金氏後裔説も同等の価値がある。婆娑尼師今の後裔説についても、朴堤上伝の冒頭で一つに連結された家系の記事全体が問題点をさらけ出すなか、婆娑尼師今との関係だけを信じるこ

15）김택균,「삼국사기 신라의 대왜관계기사 분석」『강원사학』6, 1990.
16）윗글, 29쪽 .
17）木村誠「新羅国家生成期の外交」荒野泰典編『アジアのなかの日本史』第１巻、東京大学出版会、1992;『古代朝鮮の国家と社会』吉川弘文館、2004。
18）高寛敏「新羅の堤上奈麻と奈勿王三子」『東アジア研究』9, 1995 ;『「三国史記」の原典的研究』雄山閣、1996。
19）선석열,「박제상의 出自와 관등 나마」『경대사론』10, 1997.
20）선석열,「박제상의 出自와 신분 문제(續)」『신라문화』28(b), 289쪽 , 2006.
21）주보돈,「朴堤上과 5세기 초 신라의 정치 동향」『경북사학』21, 1998.

とは適切ではないのではないか、との指摘[22]は受け入れるに値する。

チズコ・アレン（Chizuko Allen）は、朴堤上の３つの基本史料に加えて広開土王碑文までもあわせて、斬新な結論を下した[23]。倭が新羅を攻めてきた辛卯年（391）以来、広開土王が百済・倭の軍事を退けた乙亥年（399）まで、新羅は高句麗の代りに倭の影響下にあったため、王子の未斯欣を人質に捧げざるをえなかった。未斯欣が帰国したのは、高句麗が倭を討った407年の後になるであろうが、これはすぐに新羅が自立する一つの兆候であると考えた。

朱甫暾の説に依拠してチョ・ハンジョン（조한정）も朴堤上を歃良州へ移住した婆娑王の後孫であるとして、当時の金氏王室内と３姓間の葛藤を多角的に検討した[24]。堤上の妻族については宣石説の説に従い、堤上は実聖王の婿であるとした。未斯欣を人質に取っていた間にも、依然として新羅を侵略したが、それは日本の各々の地域が独自に朝鮮半島の国家と交渉できたからであるとした。

蔡美夏は朴堤上の史料を検討しながら、主に対倭関係を検討した[25]。彼は高句麗の影響下にある新羅が未斯欣を倭へ送るはずがないとして、奈勿王36年（390）に倭が新羅へ使臣を送り、新羅は倭の要請に応じて未斯欣を倭へ送ったという『三国遺事』の説を支持した。

これまでみてきたように堤上の史料を扱った先駆的業績は、新羅の社会自体と政治状況の把握に尽力するか、もしくは倭との関係設定に重点を置いた研究に二分される。そのなかでも前者については少ない史料を網羅して、ほぼすべての可能性が問われており、その結論に基づいて朴堤上伝や金堤上条のうちのいずれか一つに信憑性があるとして史料の優劣を論じている。したがって、堤上が地方出身であるとか、または元来より王京出身であるという主張、そして彼の姓が朴氏あるいは金氏であるとの主張にはそれなりの根拠はあるが、どれも決定的ではない。一方、『日本書紀』の記事では堤上の官職名がない点[26]、ストーリーが単純な点[27]などを挙げ、日本人研究者は『日本書紀』の方を原型とみている。これらの理由はさておき、史書の編纂時期から見ても、それはある面では妥当である。

古代史研究では、それ以上の進展がないとき、度々史料の限界や不足を口実にしたりする。しかし、堤上の研究においてはむしろ史料自体の説話的な性格のために議論がまちまちであった。それは、ある事実や事件が伝えられる過程で次第に史実とは離れていく時間と伝達の次元のものではなく、記述された「事件」そのものを取捨選択し、その理由や背景を説明する態度のためである。堤上について相異なる物語がある背景には、これを語る人の知識や解釈がそれほど違い、編史者の判断が介入することとなったからである。ときには彼らが語る物語が度を過ぎ、要領を得なかったり、重複したりする場合もある。この乱脈の様相から脱する方法として「どの史料も説話であり、後代の潤色が多く加味されているので、どちらか一つを無理に選択する必要はない[28]」という姿勢は適切であろう。

一方、説話分析ないしはその意味把握に尽力した文学・説話方面の研究も歴史の学界に劣らず多いが、これらは説話自体の形成過程や説話の中での構造的連結などについては意外にも軽視しており、堤上伝を享有している人々が誰であるか、それが当該時代に与えるメッセージ、すなわち意味の把握に力を注いだ。

本稿では、これらの先駆的業績を参考にしながら、対倭関係で一回だけの人質事件をどのように解釈すべきか、

22）신현웅,「박제상의 出自와 신분 문제」,『신라문화』27, 2006(a), 224쪽.
23）Chizuko T. Allen, “Prince Misahun : Silla’s Hostage to Wan from the Late Fourth Century,” *Korean Studies,* 27, 2003.
24）조한정,「박제상과 5세기 초 신라 정치」『동아시아고대학』25, 2011.
25）채미하,「堤上의 미사흔 구출 과정을 통해 본 신라의 對倭관계」『신라사학보』25ㅣ, 2012.
26）木村誠、前掲論文、322頁。
27）기노시타 레이진（木下礼仁）,「堤上傳承考」,『삼국유사의 종합적 검토』, 한국정신문화연구원, 1987, 95쪽.
28）木村誠、前掲論文、321頁。

ということに焦点を合わせて考察するものである。

2．史料分析

（1）『三国史記』新羅本紀及び楽志

奈勿尼斯今．9年（364）九年夏四月 倭兵大至 王聞之 恐不可敵 造草偶人數千 衣衣持兵 列立 吐含山下 伏勇士一千於斧峴東原 倭人恃衆 直進伏發擊其不意 倭人大敗走 追擊殺之幾盡

37年（392）三十七年春正月 高句麗遣使 王以高句麗強盛 送伊湌大西知子実聖爲質

38年（393）三十八年夏五月 倭人來圍金城 五日不解 將士皆請出戰 王曰 今賊弃舟深入 在於死地 鋒不可當 乃閉城門 賊無功而退 王先遣勇騎二百 遮其歸路 又遣步卒一千 追於獨山 夾擊大敗之 殺獲甚衆

40年（395）四十年秋八月 靺鞨侵北邊 出師大敗之於悉直之原

46年（401）秋七月 高句麗質子実聖還

実聖尼斯今．元年（402）元年三月 與倭国通好 以奈勿王子未斯欣爲質

4年（405）四年夏四月 倭 兵來攻 明活城 不克而歸王率騎兵要之 獨山 之南再戦破之殺獲三百餘級

6年（407）六年春三月 倭人侵東邊 夏六月 又侵南邊 奪掠一百人

7年（408）七年春二月 王聞倭人於対馬島置營貯 以兵革資粮 以謀襲我 我欲先其未發揀精兵擊破兵儲 舒弗邯未斯品曰 臣聞兵凶器 戦危事 况涉巨浸以伐人 萬一失利 則悔不可追不若 依嶮設開 來則禦之 使不得侵猾 便則出而禽之 此所謂致人而不致於人 策之上也 王從之

11年（412）十一年以 奈勿王子卜好 質於高句麗

14年（415）十四年秋七月 大閱於穴城原 又御金城南門観射 八月 與倭人戦於風島 克之訥祇痲立干 2年（418）二年春正月 親謁始祖廟 王弟卜好 自高句麗與堤上奈麻還來 秋王弟未斯欣 自倭国逃還

上記の史料を見れば、高句麗と新羅の関係は首肯できる。新羅では古代国家の成立が高句麗・百済より遅く弱小国であることを免れず、とくに高句麗からは外交や文化的にも多大な影響を受けてきた[29]。4、5世紀に新羅の王室に高句麗が深く関与したことは遺物からも証明され、例えば慶州壺杅塚の壺釪がその一つである[30]。すで

29）이기백, 이기동,『한국사강좌（고대편）』, 일조각, 150～151쪽, 1982参照。

30）1946年に発見された青銅壺で、その底に「乙卯年國岡上廣開土地好太王壺杅十」という銘文があり、長壽王3年（415）に高句麗からもたらしたものとして知られる。김재원,『호우총과 銀鈴塚』, 국립박물관, 1948;『호우총 은령총, 발굴60주년 기념심포지엄』, 국립중앙박물관, 2006.

に実聖王が王子のときに高句麗へ人質として行き、帰って来てから王位にあがった例を見れば、その後も高句麗へ王子を人質として送ったという記事について別に疑惑をもつ理由はない。

新羅と倭の関係は、402年に未斯欣を人質としたという記事よりも前には、奈勿麻立干９年（364）に倭兵が来襲した記事、393年に倭人が金城を囲んだという記事が確認できる。その９年後に新羅は未斯欣を倭へ人質として送っている。實聖尼師今即位年に倭と通好して送られた「質」は、倭との関係のためというよりは、新羅の国内問題や「質」の性格が通念と違う余地がある。もう一つの疑問は、未斯欣が人質にある間、相手国を４回も（405、407、408、415年）攻撃することができるかという点である。倭の攻撃を事実として受け入れるとすれば、頻繁に攻め込んできた倭は人質を取っている倭とは別の集団で互いに疎通がないものと見る他ない。

倭へ人質を送った10年後、新羅は王子卜好を高句麗へ人質として送った。そして、６年後に朴堤上は卜好を高句麗から救出し、同年に未斯欣も倭から逃げてきた。ここで注目すべき点は未斯欣の帰国記事に朴堤上が登場していないことである。これを置いて新羅本紀と列伝は、相補関係にあるので、重複を避けるために三国史記の編纂者が調整をしたものともいえる[31]。しかし、このような例が『三国史記』の別の場所で確認できないならば、これらの主張には説得力がない。この問題については後述するとして、我々が知るかぎりでは、朴堤上伝と金堤上条では堤上が倭国で殺されるため、未斯欣の帰国の記事を中心とする朴堤上本紀が間違っているわけではない。しかし、ここに疑問が生じる。第一に、倭国での行為が史実であるならば、少なくとも彼の死について言及ぐらいはあってもよいのではなかろうか。第二に、上記の本紀における敍述の雰囲気からすれば、この年に高句麗から帰ってきた朴堤上の死は、いかにも想定しがたい。第三に、いくら英雄的な忠君行為をしたとしても、一年の間に敵対的な二国から王子を取り戻してきたということは難しい。前述の通り未斯欣の対倭人質の事実を疑う立場の延長線上からは、彼の帰国もまた敍事的な構成の疑いが濃い。むしろ整合的に考えるならば、未斯欣の入質が否定されてはじめてこの頃の倭の対新羅攻撃が理解できる。

次に、『三国史記』の楽志を考察したい。

憂息樂　訥祇王時作也

憂いがなくなったという「憂息楽」の作曲背景に関しては、以下の『三国史記』列伝に詳しく出てくる。

(2)『三国史記』列伝、朴堤上

朴堤上［或云毛末］始祖赫居世之後　婆娑尼師今五世孫　祖阿道葛文王　父勿品波珍飡　堤上仕爲歃良州干　先是實聖王元年壬寅　與倭國講和　倭王請以奈勿王之子未斯欣爲質　王嘗恨奈勿王使己質於高句麗　思有以釋憾於其子　故不拒而遣之　又十一年壬子　高句麗亦欲得未斯欣之兄卜好爲質　大王又遣之　及訥祇王卽位　思得辯士往迎之　聞水酒村干伐寶靺一利村干仇里迺利伊村干波老三人有賢智　召問曰　吾弟二人　質於倭麗二國　多年不還　兄弟之故　思念不能自止　願使生還　若之何而可　三人同對曰　臣等聞歃良州干堤上　剛勇而有謀　可得以解殿下之憂〈－中略－〉遂徑入倭國　若叛來者　倭王疑之　百濟人前入倭　讒言新羅與高句麗謀侵王國　倭遂遣兵邏戍新羅境外　會　高句麗來侵　幷擒殺倭邏人　倭王乃以百濟人言爲實　又聞羅王囚未斯欣堤上之家人　謂堤上實叛者　於是　出師將襲新羅　兼差堤上與未斯欣爲將　兼使之鄕導　行至海中山島〈－中略－〉及出　知未斯欣之逃　遂縛堤

31）高寛敏、前掲書、97頁。

上 行舡追之 適煙霧晦冥 望不及焉 歸堤上於王所 則流於木島 未幾 使人以薪火燒爛支體 然後斬之 大王聞之哀慟 追贈大阿湌 厚賜其家 使未斯欣娶其堤上之第二女爲妻 以報之 初 未斯欣之來也 命六部遠迎之 及見握手相泣 會兄弟置酒極娛 王自作歌舞 以宣其意 今鄕樂憂息曲 是也

倭と高句麗にそれぞれ人質を送った年代は新羅本紀と一致する。人質運営の態様からみれば、401年に王子実聖が高句麗から帰ってきて、その翌年に実聖の代わりに新羅の王子が行ったと考えられるが、実聖の帰国後11年ぶりに卜好が高句麗に人質として行く。その間（402年）に未斯欣を倭に人質として送っているのだが、402年前後にそれほどの事件があったかどうかはわからないが、新羅と倭の間の軋轢に関して如何なる暗示もなかったことは、すでに指摘した通りである。したがって、402年の入質だけを事実として見るならば、それは未斯欣の入倭ではなく卜好が高句麗に人質に行ったことの訛伝ではないかとも考えられる。

本紀と列伝の違いは、朴堤上の活躍が列伝ではさらに目立っているという点である。後者は一人の人物の伝記であるため、主人公の活躍が増幅されるものであることは十分に予想されるが、それだけ事実に立って遠い過去の人物の伝説、すなわち文学化された観点も認めなければならない。

憂息楽を「憂息曲」と書くのは大きな問題にはならないが[32]、列伝ではその歌舞を訥祇王自身がつくったという点が異なる。この点において、我々は朴堤上伝がかなり説話的に発展していることがわかる。その内容の差は表１の通りである。

表１『三国史記』における朴堤上関連史料間の差異

	本紀		列伝	楽志
朴堤上	卜好	高句麗から朴堤上と帰国	同左	
	未斯欣	倭国から逃げて来る	朴堤上が倭国から帰還させる	
妻			「家族に厚賜する」	
娘			第二娘が未斯欣の嫁になる	
憂息曲（樂）			訥祇王が自作	訥祇王代に作られる

(3)『三国遺事』奈勿王金堤上条

奈勿王［一作 那密王］金堤上

金堤上第十七那密王即位三十六年庚寅 倭王遣使來朝曰 寡君聞大王之神聖 使臣等以告百濟之罪於大王也 願大王遣一王子表誠心於寡君也 於是王使第三子美海［一作末吐喜］以聘於倭 美海年十歲 言辭動止猶未備具 故以內臣朴娑覽為副使而遣之 倭王留而不送三十年 至訥祇王即位三年己未 句麗長壽王遣使來朝云 寡君聞大王之弟寶海秀智才藝 願與相親 特遣小臣懇請 王門之幸甚 因此和通 命其弟寶海 道於句麗 以內臣金正 謁為輔而送之 長壽王又留而不送 至十年乙丑 王召集群臣及國中豪俠 親賜御宴 進酒三行 眾樂初作 王垂涕而謂群臣曰〈－中略－〉若得見二弟 共謝於先主之廟 則能報恩於國人 誰能成其謀策〈－中略－〉臣等以為歃羅郡太 守堤上可也〈－中略－〉王既見寶海 益思美海 一欣一悲〈－中略－〉時堤上聞此言 再拜辭朝而騎馬 不入家而行 直至於栗浦之濱 其妻聞之 走馬追至栗浦〈－中略－〉行至倭國 詐言曰 雞林王以不罪殺我父兄 故逃來至此矣 倭王信之 賜室家而安之 時堤上常陪美海遊海濱 逐捕魚鳥 以其所獲 每獻於倭王 王甚喜之而無疑

32)『増補文献備考』巻106、楽考、俗部楽、憂息楽条を見ると「憂息曲」は俗称であるという（俗謂之憂息曲）。

焉 適曉霧濛晦 堤上曰 可行矣 美海曰 然則偕行 堤上曰 臣若行 恐倭人覺而追之 願臣留而止其追也〈－中略－〉時雞林人康仇麗在倭國 以其人從而送之〈－中略－〉對曰 美海行已久矣 左右奔告於王 王使騎兵逐之不及 於是囚堤上〈－中略－〉王怒 命屠剝堤上脚下之皮 刈蒹葭使趨其上［今蒹葭上有血痕 俗云堤上之血］〈－中略－〉倭王知不可屈 燒殺於木島中 美海渡海而來 使康仇麗先告於國中 王驚喜 命百官迎於屈歇驛 王與親弟寶海迎於南郊 入闕設宴 大赦國內 冊其妻爲國大夫人 以其女子爲美海公夫人〈－中略－〉初堤上之發去也 夫人聞之追不及 及至望德寺門南沙上 放臥長號 因名其沙曰長沙 親戚二人 扶腋將還 夫人舒脚坐不起 名其地曰伐知旨 久後夫人不勝其慕 率三娘子上鵄述嶺 望倭國痛哭而終 仍爲鵄述神母 今祠堂存焉

金堤上条の人質の年代は『三国史記』と異なる。その中でも美海［未斯欣］の対倭派遣の記事については論議が多い。研究者の大部分は『三国史記』の記録を受け容れ、402年に百済と倭の間の軍事協力を弱体化させるための外交戦略と考えるのに反して、蔡美夏は高句麗とそれに同調する勢力に疎外された奈勿王が、倭と軍事協力を構築して百済を牽制するためであったとした[33]。

一方、朱甫暾は、美海が倭に入質した時期が390年ということは、王子の時代に実聖王が高句麗へ派遣された時期と混同したものであり、それはこれら王子が実聖尼斯今の私感によって送られたので、未斯欣の派遣時期は実聖尼斯今のときと考えるのが正しいとする[34]。いずれにせよ390年頃に新羅と倭に間でこのような事件がなかったことは確かである。390年の人質に関するこのような分析に従えば、新羅の王子が高句麗の人質として行ったことが、倭の人質に変わったと考えることができる。

金堤上条の敍事構造を考えてみたい。朴堤上伝において音楽の憂息楽が、大尾を飾って大きな比重を占めているが、金堤上条にもそのような光景が見られる。ただし、訥祇王の二人の弟が高句麗と倭の両国に行っている状態で開かれた宴会は、どうやらその時期が間違っているように思われる。おそらく、その音楽の名前と演奏時期が忘れられた状態で、宴会だけが記憶されたのではないだろうか。この他にも、卜好を高句麗から連れ出して来るうえで、朴堤上伝では特段の計略をはからず高句麗王に訴えることだけだった点、金堤上条には葦の色が赤い理由の由来談が付け加えられている点などが異なる。

金堤上が倭国に行くときに「栗浦」の港が見え、夫が乗った船をみつめるだけの金堤上夫人という描写からは、彼が東海（日本海）を渡った状況について、別に疑いの余地はないようである。しかし、金堤上条の終わりの部分をみると、彼が倭国に去り、夫人が追いかけてきた地域は、現在の慶州排盤洞にある望徳寺・長沙・枝伐浦などの王京の境内からそれほど外れていない。このように明白に相容れない前後の地域を考慮すれば、我々は、金堤上の物語が少なくとも一度以上の変容・改作を経ながらも、その痕跡をスムーズに処理できていない状態にあることがわかる。その前後を見てみると、「初（初めて）」と明らかにした慶州一団の話が先になるはずである。それならば、初めて新羅人が指し示していた倭は、慶州から遠く離れているか、海が見える地域ではないかもしれない。後代に倭＝日本の存在や位置が明確に認識されたときに初めて事件の背景地域を変更する他なかった、その間の事情が見てとれる。李鍾恒は望徳寺を蔚山にある望海寺に改めたが[35]、上述の史料の二重性を考慮することはなかった。より明快な指摘は、美海の逃走を知って追撃したという兵士が、水軍ではなく騎兵であるという史料を考えれば、倭国が日本列島にあるとみなす根拠を失ってしまうという点である[36]。

33）채미하, 앞글.
34）주보돈, 앞글, 836쪽.
35）이종항, 앞글, 25쪽.
36）井上秀雄,「삼국유사와 일본 관계」,『삼국유사의 종합적 검토』, 한국정신문화연구원, 1987, 148쪽.

もう一つの派生する疑問は、それでは美海が果たして倭国に行ったのかという点である。朴堤上伝を検討しながら提起したことであるが、同年に二人の王子をそれぞれ違う国から連れ出してきたことに対する疑惑である。やはり、美海［未斯欣］は卜好［寶海］と一緒に語られたようである。そこに、憂息楽と関連して憂事をもう一つ作り、歌をつくったという情況が設定されたようである。現在まで美海の渡倭に対して正面から疑心を提起した研究はそれほどなかった。むしろ事実である可能性に対して、高寛民は次のように背景設定を行っている。広開土王が永樂10年（400）に任那加羅の從拔城を占領した事実を挙げ、新羅が高句麗・倭と接触し、おそらく堤上が高句麗の軍隊の先鋒に立って倭の軍に対処しただろうと推測した[37]。金石文の資料まで援用し、堤上の史料を積極的に解釈する姿勢といえるが、一人の人間を英雄視する後代の伝聞をもって推測の範囲を超えることは正しくない。以下の表で新羅の王子たちの対外派遣を年代別に一瞥してみたい。

表２　新羅王子達の派遣年代

王　代	西　暦	内　容	典　拠
奈勿王 36	390	美海が倭へ派遣される	『三国遺事』
奈勿王 37	392	實聖が高句麗へ派遣される	『三国史記』
奈勿王 40	401	實聖が帰国	『三国史記』
実聖王 1	402	美斯欣が倭へ派遣される	『三国史記』
実聖王 11	412	卜好が高句麗へ派遣される	『三国史記』
訥祇王 2	418	卜好と美斯欣が帰国	『三国史記』
訥祇王 3	419	寶海が高句麗へ派遣される	『三国遺事』
訥祇王 9	425	寶海と美海が帰国	『三国遺事』

『三国史記』には史料間に差があり、未斯欣が自力で帰国した余地を残しているが、金堤上条では美海が専ら金堤上の忠直に依存しており、堤上伝が次第に定型化していくようにみえる。これら堤上伝の定型というのは、朴堤上伝や金堤上条に表現の違いや強弱があるのはもちろんのこと、訥祇王の兄弟らが堤上の活躍により一同会しての宴会を開いたというハッピーエンデング・ストーリーである。しかし、金堤上条では楽曲の名前は出てこず、前後２回の宴会が開かれた。

朴堤上伝は憂息楽の由来を語るものであるからその証拠が宮中音楽であり、この系統の伝承は王室を中心として都の慶州を通じて伝えられたとも考えられる。これに比べて金堤上条の末尾は鵄述嶺を背景として伝わる地方の説話であり、その証拠として鵄述嶺の祠堂があり、他にも地名の由来などが伝説を実在したかのようにつくりあげている。これら証拠の物語は後日譚の性格が濃厚で、後日譚の直前の記事は金堤上の二度にわたる忠君の行績と無理なく繋がるハッピーエンデング・ストーリー、すなわち宮庭に招き寄せて宴会を催したこととなり、音楽演奏はこの段階においてはじめて調和する。その後、金堤上の妻を「国大夫人」として冊封して、何番目かは明らかではないのだが彼女の娘を美海［未斯欣］の夫人にした。

ここで二つの疑問が提起される。第一に、このようなもてなしを受けた金堤上妻が三人の娘と一緒に鵄述嶺へ登り、泣いて神母になったという後日譚とは辻褄が合わない。後日譚なら事件が一段落ついた後、朴堤上の場合、彼自身は大阿湌に追贈され、その娘が未斯欣の夫人になったとするもう一つの伝説の終わりに相応しい話である[38]。金堤上条で金堤上の妻が後に受けた礼遇と鵄述嶺山神の物語は互いに矛盾するので後日譚というより

37）고관민, 앞책, 90～91쪽.
38）高寛敏もこれを「後日譚」とした。고관민, 앞책, 90～91쪽.

も、むしろ別々の話の重畳である。このような点は朴堤上が倭国へ行くときの背景の地名が互いに異なって表れているように、どちらか一方は史実からかけ離れた話となる。金堤上条のストーリーの本流と後日譚を区分して表で提示すると次の通りである。

表３　金堤上条の二重性

	一代記		後日譚
金提上	寶海	高句麗から金堤上と帰国	
	美海	金堤上が倭国から帰還させる	
妻	国大夫人に冊封		夫を待っているうちに神母となる
娘	美海の妻になる		３人の娘全員が神母と山神になる
	宴会を開く		神堂ができる

第二に、「国大夫人」の用語問題である。これは高麗時代の文宗（1019～1083）のときに定めた外命婦の品階で夫や息子が府院君・国相などの高い官職へ上がった女性たちが受ける。時代的に金堤上の夫人がこの爵号をもらうはずはないが、何の理由もなく出てきたとすることも難しい。ところが後日譚で金堤上の妻が鵄述嶺神母になり、その祠堂があったと述べられたため鵄述嶺の女神・山神として金堤上妻が奉られたが、その神位が「○○○国大夫人」であったようである。名山大川へ爵号を下すことは高麗の祭祀制度の一環で穆宗の即位年（997）に国内の神々に勲号を賜与して以来、高麗末まで持続的に行われた[39]。それは自然神にも王以下、公卿大夫の場合のように擬人化して封爵を与えるものなので「国大夫人」はその神格が女性であるときに該当する。高麗末の全羅道の淳昌の「城隍大神事蹟」に城隍神を夫婦合称して「淳昌城隍大夫三韓國大夫人」と書いたように、このような例を確認することができる[40]。

(4)『日本書紀』神功皇后 五年条

五年 春三月癸卯朔己酉 新羅王遣汙礼斯伐・毛麻利叱智・富羅母智等朝貢 仍有返先質微叱許智伐旱之情 是以 誂許智伐旱 而給之曰 使者汙礼斯伐・毛麻利叱智等 告臣曰 我王以坐臣久不還 而悉沒妻子爲孥 冀蹔還本土 知虛実而請焉 皇太后則聽之 因以 副葛城襲津彦而遣之 共到對馬 宿于鉏海水門 時新羅使者毛麻利叱智等 竊分船及水手 載微叱旱岐 令逃於新羅 乃造芻靈 置微叱許智之床 詳爲病者 告襲津彦曰 微叱許智忽病之將死 襲津彦使人令看病者卽知欺 而捉新羅使者三人 納檻中 以火燒而殺 乃詣新羅 次于蹈鞴津 拔草羅城還之 是時俘人等 今桑原・佐糜・高宮・忍海 凡四邑漢人等之始祖也（巻９）

朴堤上伝では堤上の別の名前で毛末とも言われるとされたが、神功紀五年条の毛麻利叱智がまさにこの系統の表記である。倭に人質で来ていた新羅人の名前である微叱許智伐旱も未斯欣であることはすぐにわかる。韓国側の史料とは異なり、神功紀では毛麻利叱智は新羅の使臣の三人の中の一人である。韓国側の史料で堤上だけ際立ったのは新羅で堤上の子孫が繁栄し、彼を祖先として奉る氏族が多かったためであろう。いずれにせよ、新羅の使臣が倭国へ来て奸計を使って新羅の王子を救い出し、彼自身は火刑に処されたというあらすじはどれも似ている。一番大きな違いといえば、神功紀五年条には毛麻利叱智の夫人が登場しない点である。

39）김기덕,「고려시대 성황신에 대한 봉작과 순창의 '성황대신사적' 현판의 분석」,『역사민속학』7, 1998, 18쪽.
40）신종원,「설공검－순창의 성황대왕」,『한국 대왕신앙의 역사와 현장』, 일지사, 2008, 参照。

同じ「史実」が新羅と日本の両国でともに伝わるものは、これらの国で各々伝承・採録された可能性もあるが、実際にはそうではないらしい。神功紀五年条の末尾を見ると、この条は４邑漢人の祖先の渡来伝説ともとれるが、元来は別々のものである毛麻利叱智の事件と４邑漢人の祖先の話を結合させたものであるという[41]。この二つの関係如何についてはさておき、記事が暗示することは、大勢の新羅人が渡ってきて、彼らと毛麻利叱智の事件とが関連があるとのことである。これは、すなわちこの事件が新羅人から伝え聞いたものとなる。これ以外にも微叱許智伐旱の官位に新羅の借音訓がある点などをみれば「未斯欣の史伝は新羅文献によって『日本書紀』の撰者が採用」したということは[42] 充分に納得できる。神功紀五年条はそれが掲載されている史書の『日本書紀』が『三国史記』・『三国遺事』より古かったという長所は大きいが、やはり堤上伝の一つの各篇（version）にすぎず、その特徴は倭地における倭人の視覚的記述であるという点である。神母祠とか望夫石がないところで堤上夫人の記事が現われないことは当然である。

３．憂息楽、鵄述嶺祠堂の由来

『三国史記』の楽志では憂息楽について「訥祗王のときにつくった」と書かれたのに対して、朴堤上伝では「訥祗王が自らつくった」として説話的に１歩前進した。紀伝体史書の篇目の性格上、客観的な概観と羅列為主の志というよりも、ある人物の生涯を描いた列伝は誇張や歪曲がひどいのであるが、我々はそのような例を『三国史記』の金庾信伝でよく目にする。楽志が比較的公正で且つ史実本位であるのは次の例を見れば納得がいく。

> 鄕三竹 此亦起於新羅 不知何人所作 古記云『神文王時 東海中忽有一小山 形如龜頭 其上有一竿竹 晝分爲二 夜合爲一 王使斫之作笛 名萬波息』雖有此説 怪不可信（『三国史記』巻32）

これに比べて『三国遺事』紀異篇の萬波息笛条では「大王信仰」の俗説がもっともらしく史実のように作り上げられていた[43]。

前の時代に歌われた歌についてその作曲背景とする史書の記述は概ね迂遠して歌自体とあまり関係があるようには考えられず、それらのなかには歌にふさわしい「史実」を作り上げたような印象を受けたりもする。次の例を見てみたい。

> 利見臺．世傳，羅王父子久相失，及得之，築臺相見，極父子之懽，作此以歌之，號其臺曰利見．盖取易利見大人之意也．王父子無相失之理，或出會隣國，或爲質子，未可知也．（『高麗史』巻71，楽志2）

著名な『三国遺事』萬波息笛条には、海の竜になった文武王を見たところに地名の「利見臺」が出てくる。作曲の背景が史実から始まったような説明は堤上伝にもそのまま適用される。すなわち憂息楽という音楽が先にあり、その音楽の背景説話として二人の王子の人質事件が語られる。

それでは、後日譚を見てみたい。一次証拠という憂息楽は演奏の時期が限定されており、王朝が変わるのにつれて段々薄くなり[44]、目に見える証拠である神堂が新しい証拠となって、伝説における重量の中心は堤上妻の方

41）三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考証』吉川弘文館、1962、86頁。
42）同上、83頁。
43）신종원, 앞책, 2008, 第４章２節「文武王」参照。
44）この歌は、歌詞が忘れられたまま演奏だけが朝鮮時代の世宗代まで残っていったといわれる。三品彰英、前掲書、77頁。

に移っていく。現在は長沙などの地名が主な証拠になっているが、泣き叫んだ夫人が鵄述嶺へ登ったということは、一方では鵄述嶺に神母の絵［堂神図］があって出てきた話である。

神堂以前の神格は他でもない巨石（→望夫石）であり[45]、結局、石という自然神が神堂の巫女図へ発展したものである[46]。このように考えれば夫を待つ妻はすでに鵄述嶺に予め備わっており、その主人公がどの時代の誰であるかによって、それは普通の町の民譚の証拠にもなりえ、崇高な歴史の現場にもなりえる[47]。言い換えれば、これらの「物語り vs 歴史」、「証拠 vs 史蹟」の違いによって話者はありがちなストーリーテラー（storyteller）にもなりえれば、崇高な過去を記憶させる歴史家にもなりえる。しかし、意味付与という説話の属性上、前者よりは後者を選好しがちであり、それも一介の伝説の次元でなく歴史上の劇的な場面へと形を変える。

隣国へ散り散りばらばらとなった兄弟たちが紆余曲折を経て会うことになるためには、その前提として高句麗へ行った卜好に加えて未斯欣もまた倭へ行っていなければならない。鵄述嶺を始め、栗浦[48] などがみな東海に沿った地域であるため、人質の対象国としては倭が御誂え向きである。未斯欣の渡倭を想定しなければ兄弟間の再会を歌う憂息楽の存在理由は半減する。我々は先に新羅の対倭人質が色々な面で不整合性を露わにしていると分析したのだが、それは憂息楽の作曲背景をつくり出す過程で生じるに他のない現像である。憂息楽の存在こそが未斯欣の渡倭を証明する説話上の証拠である。

ここで神功皇后五年条の毛麻利叱智の記事をみてみたい。これが堤上の資料の中で最も原型に近いこと[49] は一理がある。その理由は、使者の名前が載っていて、物語の部分が比較的少ないという点を挙げられているが、これらの単純な比較には危険性がなくもない。編年体の『日本書紀』と列伝形式の堤上伝とは、単純な比較はできない。また、『日本書紀』に比べて高麗中・後期に編纂された史書の出現時期も毛麻利叱智の記事の優位を物語ってはいるが、一方で堤上伝は彼の職名が残っている。毛麻利叱智の記事では、日本人の関心事に応じたり、堤上の在倭史跡だけが掲載されたりしているが、彼の主な功績は、むしろ対高句麗活動にある。

堤上の在倭活動と関連して、特に彼が死亡した地域が覇家台、すなわち今日の福岡県博多であり、さらに正確には冷泉津七里灘という伝承が残っていることでも[50]、これを素直に受け入れないことは慎重すぎて、かつ否定的な態度といえるかもしれない。しかし、この問題は、中国の秦始皇帝の時代に不老草を取りに海東に来たとする徐市の故事と比べてみるに値する。韓・中・日の三国の記録のすべてに登場し、その遺蹟地と知られた場所が多数あるにもかかわらず、徐市史蹟は依然として虚構の次元で評価されている[51]。

堤上妻が、倭国へ行く／行った郎君を望みながら痛哭したということは朴堤上伝と金堤上条が一致するが、この記事が暗示する証拠は地名の栗浦である。堤上が二番目に行った国は国境を隣り合わせにした高句麗や百済ではなく海を隔てた倭国であるから、このように東海に接している港が相応しい。金堤上条の後日譚では堤上の夫人が三人の娘をつれて鵄述嶺へ登り、倭国を眺めながら泣きわめいた後に鵄述神母になったとして、栗浦だけで

45）兪好仁の次の詩が参考になる。「鵄述峯頭三丈石 愁雲猶帶望夫魂」（『新増東國輿地勝覽』巻21，慶州府，雑詠）

46）慶北尙州市蔓山里の巨石と城隍堂が参考になる。**김기탁,「천봉산의 성황사」,『상주 민속문화의 이해』, 민속원,** 2003. 神体については次のような論文がある。**이관호,「마을신앙 대상물로서의 神体의 유형과 특징」,『생활문물연구』21, 국립민속박물관,** 2007.

47）類似例としては、雲帝山の聖母が南解王の妃の雲梯夫人だとする『三国遺事』紀異、南解王条を挙げることができる。

48）その後、「東津」に地名が変わった。「東津縣 本栗浦縣」（『三国史記』巻34，地理志）。栗浦は高麗時代以後、「柳浦」に名前が変わって堡が設置されたが、その遺跡を探した結果、蔚州郡江東面亭子里がそれだと言われる。**『박제상사적조사보고서』, 교원대학교,** 1987, 54～55頁。東津については、濱田耕策の「新羅時代の港町――東津と西津を中心に」の発表がある（韓国学中央研究院、2010年、12月）。

49）木下礼仁「五世紀以前の倭」『日本書紀と古代朝鮮』塙書房、1993、339頁。木村誠、前掲書、322頁。

50）朝鮮時代に日本に通信使として行った使節の紀行文である海槎録や海槎日記などでしばしば言及されているが、これについては**소재영,「박제상 설화」,『한국설화문학연구』**(3판)，**숭실대학교출판부**, 1984, 1997で紹介されたことがある。次の論文も参考となる。藤井甚太郎「新羅朴堤上死處の傳説に就きて」『歴史地理』26-1、1915年。

51）逵志保『徐福論――いまを生きる伝説』新典社選書、2004年。**신종원,「이른바 '서불석각' 의 실체와 서불전설의 의미」,『한국 해양신앙과 설화의 정체성 연구』, 해상왕장보고기념사업회,** 2009.

は夫婦の生き別れの証拠にするには足りなかったようである。鵄述嶺にある祠堂[52]こそ金堤上条で強弁されるもう一つの証拠であり、金堤上条の後日譚は堤上渡倭説の補強であり、説話論理上の発展である。祠堂が崩れ落ちた後のある時点からは祠堂の代わりに望夫石が堤上夫人の証拠として記録され、それは現在でも同じく次第に他の証拠で補強されてきている。ここでもう一つ指摘しておきたいことは、このような人為的な論理補強でもそれら相互間の衝突は隠せないという点である。堤上夫人が夫を望めるだけの地点ならば当然、栗浦に他ならないが、鵄述嶺は夫婦の離別地点とは別の位置にある。これまで対倭の人質というものに韓日の学界が過度な比重を置いてきたが、その実相はむしろこのような説話上の問題に依っている。

海辺の巨石がいつの間にか望夫石になり、彼女の夫が戦場や敵国へ行って帰ってこないと語られる例は珍しくはない。釜山の太宗臺の望夫石は倭寇に連れて行かれた夫を待ちながら石になったといわれ、忠南の瑞山郡の安面にあるハルミバウィ（**할미바위**）は清海鎮の責任者であるソンオン（**성언**、**승언**）将軍が出征して帰らないために彼女がこの岩で亡くなったという地名の由来がある。これらの説話はかつて書かれたことはなく、現在は口述される内容から望夫石の説話の生成をリアルタイムに考えるものである。

鵄述嶺は慶州の東南方にある峠で蔚山との境目にある。祠堂の敷地は山頂にあり、そのやや下に望夫石が二つあるが、各々慶州市と蔚州郡の行政区域に属する。これら市郡では自らの区域のものが伝説上の望夫石であると主張しているが、近年には第三の説も台頭したことがある[53]。しかし、ここからは海が見えない[54]。したがって、後日譚をもっていえば、倭国はそれこそ必要によってつくられた人為的な対象なのである。

後日譚はこれで終わりではない。金堤上の夫人は望夫石から落ちて鳥に生まれ変わり、隠乙巖（隠乙岩）[55]に隠れたという。この巨石と霊験譚によって庵子の隠乙庵が建てられたと考えられるが、このストーリーは朴氏家乗にも著されている[56]。このモチーフも実は地名から出たものであるので、鵄述嶺は俗称が「スルギチェ（**술기재**）」であり、それ以前の言葉は「スリ（**수리**、ワシ）」であった[57]。漢字の「鵄」は「ソルゲ（**솔개**、トビ）チ（**치**）」だから、「スルギ」は「ソルゲ」から出た言葉であろうし、「スリ」もまた「ソルゲ」のような猛禽類である。ところが、「山」もまた「述」であるため[58]、山神である鵄述神母は鳥になる素地を胎生的にもっていた。その鳥が隠乙庵に隠れたというのは、すでに鵄述嶺の神堂も廃絶された後、その山神の住処が隠乙庵へ移ったものであるため、証拠の置換というわけである。

神堂や望夫石・隠乙庵のすべてが鵄述嶺から外れていない。堤上妻を浮き彫りにするためにすでに都城の証拠の地名が出たことがあるが、堤上の行蹟とともにする夫人ならば少なくとも鵄述嶺のようにいつも座っている姿にならなければならず、説話がどのように発展していても堤上夫人は鵄述嶺の山神の圏域から外れはしない。ここが対倭交流の通路であるために説話はより写実的になり、望徳寺などの証拠は次第に説話から消えていってし

52）現在、鵄述嶺頂上の祠堂の敷地には「神母祠址」と石に刻んだ零牌が立てられている。この場所は1971年に韓国日報が主催した東海岸学術調査団によって発見された。当時、新羅土器をはじめ高麗土器、朝鮮時代の瓦の破片、葉銭などが多く発掘された。

53）「ここで望夫石を第１、第２と呼ぶことは、便宜上、筆者がつけた名称であるが、最初は金校夫人が、この第１望夫石で東海を眺めてさらに東海を密接に眺めることができる場所を探して頂上を超え、第２望夫石に上がったと考えられる。」（『**박제상사적조사보고서**』, **한국교원대학교 박물관**, 1987, 69**쪽**.）

54）「筆者（**권영호**）が踏査したことがあるが、現在は海が見えない。」**권영호**,「**박제상 전승의 양상과 의미**」,『**어문학**』25, **한국어문학회**, 2002. 筆者（辛鐘遠）も踏査して写真と対談を報告書に載せておいたが（『**한국 해양 및 도서 신앙의 민속과 설화**』**현지조사 1 동해안**, **해상왕장보고기념사업회**, 2009, 353～359**쪽**）、海が見えるとは誇張だといえる。一方、海に隣接した地域であることを積極的に強調する人もいる。「この岩（望夫石）から東海を眺めると、晴れた日には東海がたわんで見える。」（『**박제상사적조사보고서**』, **한국교원대학교 박물관**, 1987, 69**쪽**.）

55）鳥［乙］が隠れた［隠］とその名を解釈する。

56）「鵄述鳥 入巖窟因號隱乙巖 王聞之感而作隱乙庵」（前掲『**박제상사적조사보고서**』75**쪽**）。

57）『**한국구비문학대계**』7-2, **월성군 외동면 설화** 85, 1980. 1936年の**최상수**の採録（『**한국민족전설의 연구**』1988, 143**쪽**）では「**수릿재**」となった。

58）例えば、慶州の西岳は西述と『三国史記』祭祀志、小祀条に出てくる。このほか、『新増東国輿地勝覧』巻21、慶州、山川、祠廟条を参照。

まっている。

隠乙岩に対する上掲の地名の由来も実は朴堤上の事蹟が広く知られた後、周りに朴堤上の祠堂と神母祠などが建てられながら形成された話である。隠乙庵がある高嶺は「グクスボン（국수봉）」であるが、漢字表記は様々であり、よく「グクサボン（국사봉）」ともよばれる国師（국사）の信仰所である[59]。したがって、元来は高い山の聖所であり、そこの岩を「隠乙庵」とした。このグクサボンから由来したと推測される[60] 隠乙庵の「米岩」伝説がある。

> 隠乙庵を建てる前は、傍に数名の人が入って収まるほどの大きい岩があり、岩の下の穴からは毎日一人が食べる位の米が出た。そして修道者はこの米で延命しながら修道した。しかし、穴がもっと大きいと米がそれだけ多く出るだろうとの欲気から穴を掘り広げると米はそれ以上出ず、その代わりに水がちょろちょろ流れ出てきた。その後、鳥三羽が水の中に入り、これにより、ここにお寺を建て、隠乙庵と称した[61]。

後日譚では金堤上の夫人が新たに浮き彫りになったとしたが、口伝説話では朴堤上は国に対する義務を実践する不特定な人物で、理想的な忠を強要され犠牲になるばかりの民衆の夫、すなわち説話の担当層自身へと変わっていく[62]。

証拠の置換は（望夫石）→鵄述嶺祠堂→望夫石→隠乙庵だけでは終わらない。憂息楽が朝鮮時代のあるとき滅失した以後、新しく「鵄述嶺曲」が登場する。『増補文獻備考』俗部楽には朴堤上夫人が夫を慕いながら神母になった史跡を著した後「東都樂府有鵄述嶺曲」と記録したため、少なくとも19世紀頃には鵄述嶺曲が存在した。この歌の歌詞などには一切の言及がないが、現在の蔚山・蔚州地方の民謡に残っている。

「치술령가」

> **어화 세상사람들아 / 이내말씀 들어보소 / 옛날옛적 박제상 어진양반 / 나라위해 충성으로 / 일본국에 들어가시고 / 그의아내 열녀로서 / 치술령 상상봉에 불철주야 바위에서 망부하니 / 그바위 망부석이 되었구나 / 또다시 대마도를 바라보고 / 바위에서 떨어지니 / 새가되어 날았으니 / 그마을이름이 비조가 되었구나 / 국수봉 상상봉에 숨어드니 / 그이름 은을암이더라[63].**

憂息楽がなくなった状態になると鵄述嶺曲がその場所を占めたが、やはり歌の中の主人公は説話の発展と同様に朴堤上の夫人にならざるをえない。

4．堤上伝の生成と発展――結論の代わりに

歴史上の堤上、または「堤上」と記憶される人物が新羅上代の地方出身で国政において多くの活躍をしたことであろう。彼は対外関係においても高句麗へ人質に取られた王子を連れて帰るという輝かしい功を立てた。その後にこのような状況と王室家族の相逢を称える話と歌舞があまねく広まり、この音楽についての解説が伝えられ

59）김태곤,「국사당신앙연구」,『백산학보』8, 1970. 신종원,「필사본 조선지지자료 강원도편 해제」,『필사본 조선지지자료 강원도편 연구』, 경인문화사, 2010, 36～37쪽.

60）江原道高城郡の禾岩寺の禾岩（수바위）にも米が出てきた米岩の伝説があり、昔は岩から出てきた小麦粉で麺をつくって食べたという話（국수틀 이야기）も伝えられている。신종원,「필사본 조선지지자료 강원도편 해제」, 위책, 44～45쪽、参照。

61）서영대,「울산지역의 사찰설화」,『울산연구』3, 2001, 95쪽.

62）권영호, 앞글, 103～104쪽.

63）울산대인문과학연구소편,『울산・울주지방의 민요자료집』, 울산대출판부, 1983, 555～556쪽.

る過程で彼の活躍が倭までその範囲を拡大した。後日譚の性格をもつ鵄述嶺の祠堂は、堤上伝に彼の夫人の烈女像が加えられる史料を提供するに至り、現在、伝えられている口伝には堤上妻の霊魂が隠乙庵に息づいているという。

堤上の史料は歴史上のある事件と人物が糸口になり、一篇の敍事文学として完成する。これが、堤上伝が歴史から説話へ発展していく過程であれば、逆に地名、巨石、祠堂、庵子などの由来が歴史の間に入りこみ、一篇の史料としてよみがえったりもする。いうなれば、各々「史実の敷衍」であり、「証拠の背景史」である。

本稿で筆者は、堤上の事蹟の証拠として兄弟間の再会を歌った憂息楽を一番大きく取り上げた。その憂いというのは新羅の王子が隣の国へ人質に行ったことで、そのような憂いを強調するならば人質に行った国が多ければ多いほど望ましい。このような説話の論理から未斯欣［美海］の倭国派遣のモチーフが出てきたと考えた。堤上妻の悲しさも夫に追いつけない地理的な与件にならなければならないため、栗浦から鵄述嶺へと証拠が発展し、鵄述嶺で海を眺めながら倭国へ行った夫を待っているものとして展開された。史書と口伝で伝われる堤上伝の発展はこれまで分析した段階で段落づけられ、段階ごとに揚げる証拠も異なって現れることを目にするのは興味深い。

堤上の対倭人質の史料には意外に互いに衝突したり、道理にかなうように理解できなかったりする点が少なくない。それは当時の対倭関係の実相から離れている人物の功績を宣揚し、忠烈精神を育成する過程でもたらされた結果である。結論的に言えば、堤上伝を当時の史料として活用するには限界が多い。

歴史と説話が錯綜している史料から史実を探し出していく作業は容易いことではない。それは双方が影響を与え、双方が似通い合っていきながら一つの立派な敍事的構造に完結されるためである。したがって、史実追跡の作業は、この完結された史料／説話のなかで不整合性／断絶性を見い出す作業なのである。